

---

# 異界に降りる黒き鬼武者

白銀の翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異界に降りる黒き鬼武者

### 【Nコード】

N1626BA

### 【作者名】

白銀の翼

### 【あらすじ】

慶長三（1598）年、八月十七日の伏見城で関白豊臣 秀吉、幻魔の創造神フォーティンプラスを倒した破壊神の寵児、黒き鬼武者灰燼の蒼鬼こと結城 秀康は、後の未来を仲間や実父、双子の弟に託し、『後始末』をするために自ら妖星の中に消えていった筈だった。

一方、ある魔法世界では、ある部隊と次元犯罪者との戦い 首謀者の名前がそのまま事件の名前になる程の重大事件が起きようとしていた。

黒キ鬼、消失ノ時（前書き）

新・鬼武者とリリカルなのはのクロスが無いので勝手に作っちゃえ  
！というので作りました。

文句は一切受け付けません！

## 黒千鬼、消失ノ時

「桜を見たら、俺の事を思い出してくれないかな。時々で良い……。」

ただ、それだけで良い……。」

慶長三（1598）年 伏見城

”桜”こと幻魔樹の枝から、花びらに似た幻魔虫が舞う中、青い具足を着、二本の大太刀を背中に背負った一人の青年若武者、結城秀康”灰燼の蒼鬼”が、何も無い空間の中に入っていく。

障壁の向こうで一人の小柄な少女、柳生 十兵衛 茜が泣き叫んでいるが、それももう聞こえない。

少女以外の三人の仲間はずり、力を失っている。

『後始末をする』

そう言っただけ鍛え上げられた肉体と意識が、妖星の中に溶けていく中、頭の中に思い浮かぶのは、彼の代わりに結城家の当主となった双子の弟と、実父である徳川 家康。

双子の弟、永見 貞愛は理想国家を築きたいと言っていたし、領民達を良く指導し、当主として慕われていたから大丈夫だ。

徳川 家康は実の息子である秀康を嫌っていたが、幻魔に身体と魂を売った信長と秀吉両人の様に、幻魔に力を貸したり身体と魂を売ったりする事は無いだろう。

差し詰め、人外の力を鬼武者の力に頼る事も無い。

それよりも最強最悪の鬼武者と呼ばれていた自分が、何時悪き力に心を支配されて人間達に仇なす者になるのが解らない。

(らしくねえな……)。

まるで生きたいって言ってる様じゃねえか……)

秀康、以後蒼鬼はそんな考え方を始めた自分を嗤う。

覚悟を決めて、死を恐れずに大陸や幻魔と戦った筈なのに、何故か今は死ぬのが怖い。

確かこれは、結城家の前当主、つまり養父が言っていた。

生に縋るのは生きとし生きるもの全てにとって当たり前である、と。

そして蒼鬼自身の生き様と言っても良い、人の生き様は自由であり、誰にも生き死にを強制されるものは無い、と。

(まっ、これも良いか)

蒼鬼は思考を止めて、迫り来る虚無感に身を委ねた。

これが異世界での戦いの幕開けなのにも知らずに。

異界に降りる黒き鬼武者

始まります

邂逅 物語ノ始まり(前書き)

作者「精悍な性格に全く自信ありません！(キツパリ)」

蒼鬼「自信持ってキツパリと言つ必要無くね!？」

## 邂逅 物語ノ始まり

「……………ん？」

右頬に当たる堅い感触に、蒼鬼はうつすらと目を覚ました。

ゆっくりと身体を起こし辺りを見渡して見ると、蒼鬼の目に信じ難い光景が映し出された。

「……………ここは何処だ？」

目に映ったのは何か特殊な石で出来た地面と、その地面から生える様に立っている幾つもの石で出来た塔。

塔には無数の亀裂が走っておりまた傾いたりしているのもあれば倒れているのもあり、地面には亀裂と共に所々に瓦礫が鎮座している。

大気も日ノ本の様に荒んでは無く、澄み切っている。

確かに自分は先程、『後始末』をする為に自らを妖星の中に入った筈だ。

なのに何故、今この場にいるのか？

考えても謎がどんどん深まっていく。

「何なんだよ……………」

次に身体に何か異変があるかどうか見てみた。

身体は先程と同じ蒼具足で背中に二振りの蒼紅の大太刀、”山河慟哭”と”血染山河”が納まっていて再び振るわれるその時を待っているが、右腕にはそこに無かった物があった。

「何で鬼の籠手がここにあんだ？」

鬼の籠手。

伝説の赤き鬼武者が二体の幻魔王を封印した籠手であり、天海が腕に付けていた筈の物だ。

伏見城でフォーティンプラスとの最終決戦で、自らが極限鬼武者になった後、天海が腕に着けた筈なのに何故ここにあるのか？

「まあ、深く考える事でも無いが」

鬼の籠手が何故ここにあるのか、考えるのは後だ。

取り敢えず状況を確認し、情報を集める。

決めたら実行するだけだ。

周りは相変わらず見た事も聞いた事の無い塔と地面だらけだがロベルトの父の国でありまだ見ていない未知の国、イスパニアの様な国だろう。

文明が滅んでない以上、人間がいる可能性も充分考えられる。

「さて、探すか」

そう言った時だった。

ドオオオン！！

「っ！？」

突然響いてきた爆発音に、蒼鬼は神経を集中、全身の産毛を逆立たせると背中の子青き大太刀、”山河慟哭”を抜く。

爆発音は塔に反響していた為、方向は解らないが爆発の名残である黒煙が前方の塔三つ先の方向だ。

蒼鬼は、右手に握った”山河慟哭”の握力を強め、その場所に向かって駆けていった。

塔を擦り抜け、ひび割れた地面を駆けて、一分とかがらずに着いたその場所で戦闘が行われていた。

嫌、正確には後だった。

宙には数機の楕円型のカラクリがあり、地上には変わった服と武器を持った人間達が倒れ伏している。

ふと、数機のカラクリが蒼鬼に気付き、無数の青白い光弾を放ってきた。

「おいおい、いきなり何だよ！？」

着弾しようと迫る光弾をサイドステップで躲すと、蒼鬼は青い大太刀を構える。

カラクリの正体が幻魔かどうか解らないのに、いきなり攻撃されるのは溜まったものではない。

しかもカラクリからは、何故か無機質な敵意や殺意を感じる。

こうなれば、やるのはただ一つ。

「お友達になりたいって面じゃねえな……。  
良いぜ、かかって来な！」

黒き鬼武者の戦闘が、始まった。

黒き鬼が地と宙を駆けて、青い刃が大気を斬り裂いて線と閃きとなり、カラクリを真つ二つにしていく。

無論、カラクリ達も光弾で反撃に出ようとするが、その寸前に斬り裂かれてしまっていた。

困んで一斉攻撃を仕掛けようとすれば、背中に納まっている”血染山河”の浄化剣により、看破されてしまう。

結果、カラクリ達は僅か数秒で全滅に追いやられていた。

「さて……」

蒼鬼は息を荒げる事なく戦闘を終わらせると、変わった服を着用し倒れ伏している数人の人間達に近付き、脈拍を調べ始めた。

既に全員急所を撃ち抜かれて事切れている。

流石に死者の持っているのを調べるのは気が引けたが、今はそんな事を言っている暇は無い。

「……………何だよ、この服と武器は……………？」

衣服に関しては戦闘においての防御力を考えていないのか、甲冑の様な部分は見受けられない。

武器に関しては知っている大太刀や種子島、錫杖、居合刀には一切仲間に入らない物だ。

一番近いのは錫杖だが、殴打や突きには向いていない形状だ。

玉鋼ではない、何か別の材質で出来ている。

更に探してみると、何か名刺みたいな物を見つけたが、

「読めねえ……………」

そこに書かれていたのは自分の知っている文字ではなく、何かぐつちやくちやになったみたいな文字だった。

「ロベルトや天海でも読めなさそうだな、これ」

大した情報を見つucker事が叶わず、蒼鬼はふうとため息を吐くと、周りを見渡してみた。

「ん？」

先程破壊したカラクリの残骸から、何か光って存在を主張している。

「何だ？」

死体から離れてその残骸に近付き残骸を漁ってみると、その中には青い輝きを放つ菱形の小さな宝石があった。

鉱物ではなく整った形だが、力強い光を放っている。

「装飾品か？」

装飾品としても何にしても何にも部類されない。

だが、持っているとか何か鬼力や心力が回復していく様な感じがする。

「まあ持っていた方が良いか」

何なのかは解らないが、このままここに放置している訳にはいかな  
いだろう。

蒼鬼は懐から出した小さな守り袋に、その宝石を納めるとゆっくり  
歩みを進めた。

だが

「ん？」

上空に何かの気配を感じたのか、蒼鬼は上を向く。

上空から何か金色の光を放ち、降りてきている。

光が納まるとそこには、長い金髪をツインテールに結び、黒と紺の服に白いマントを着た女性がいた。

手には何か黄金の刀身を持った、蒼鬼の大太刀と比べて少し長さが短い大剣を持っている。

そして、女性が声を出す。

「時空管理局古代遺失物処理管理部機動六課所属のフェイト・T・ハラオウンです！

貴方の持っている”ジュエルシールド”を渡して貰います！！  
それと、質量兵器やロストロギアの所持で拘束させて貰います！！」

「……………？」

大剣の切っ先を突き付けるフェイトという女性に、蒼鬼は啞然とする他無かった。

いきなり空から現れたと思えば、時空管理局、機動六課、”ジュエルシールド”、質量兵器と聞き慣れない単語の羅列を聞けば何なのかについていく事が出来なかった。

だが、目の前にいる女性、フェイトは待ってくれなかった。

思考している間に、黄金の大剣が迫っていたのだ。

「チイツ！」

迫りくる刀身に、蒼鬼は右手に持った”山河慟哭”を眼前に掲げて防ぐ。

黄金の刀身と深蒼の刀身がぶつかり合い、鏝ぜり合い激しい火花を散らす。

「くっ………！」

「………ええい！」

火花を散らす中、蒼鬼は”山河慟哭”の角度を180度変えて斬り上げる。

「きゃあー!!」

フェイトは力負けしてしまい、上空に投げ飛ばされてしまっが、空中で体制を整える。

「”バルディッシュ”！  
フォトンランサーセット!!」

「了解！フォトンランサー!!」

「ファイア!!」

相棒からの合図と共に、フェイトの周りに無数の金色の魔法陣が現れ、光の矢が放たれる。

蒼鬼は無論驚いているが、今はそんな事を考えている暇は無い。

「っ！」

向かい来る光の矢が青い鎧に当たる寸前、蒼鬼が動く。

今にも鎧に当たる寸前、蒼鬼は姿勢を低くし、青い閃きが矢を斬り裂いた。

しかも一回ではない。

それを数回繰り返し、全ての光の矢を真っ二つにしたのだ。

これまでの戦いで身に付けたカウンター技『連鎖一閃』だ。

「なっ!?!」

フェイトは驚愕に目を見開く。

が、蒼鬼はそんな暇等待つてくれる筈も無く先程のお返しという風に跳躍し、斬り付ける。

「おらあ!」

「っ！」

間一髪、フェイトは左手にシールドを発生させて防御体制に入る。

高機動戦闘を得意とするフェイトは、基本的に防御力が低くシールドの強度も低いが、それでも通常の魔導師や質量兵器の攻撃を防ぐ

事は出来る。

だが、今の目の前の光景は違った。

青い大太刀の閃きは線となり、シールドをまるで紙切れの様に斬り裂いたのだ。

「なっ!?!」

再び驚愕するフェイトだが、身体は無意識に動きまた大剣の刀身で防ぐ。

しかし、蒼鬼はすぐに刀を離してフェイトの横腹に蹴りを食らわせて地面に叩き付けるが、フェイトはすぐに受け身を取って立ち上がる。

(強い……)

一撃で決めるしか無い……)

フェイトは乱れた心を何とか静めて平常心に戻すと、ザンバーフォームの”バルディッシュ”を構え、目の前の蒼鬼を睨みつける。

何としても拘束し、話を聞くという譲れない思いがあるから。

対し蒼鬼はもうこれ以上戦う気は無かったが、今言ったとしても、フェイトは止まる事は無いと判断しているのか、大太刀を構える。

(これで決めるしか無え、か……)

蒼鬼の右腕が、光を纏う。

赤、緑、そして青にその色を変える。

日ノ本での戦いの中で編み出した必殺技『鬼戦術』だ。

武器に赤魂を注入する事でそのレベルや威力が上がるものだ。

一方、フェイトは相手の力が溜まっていくのを感じ、ある魔法の使用タイミングをじっと待っている。

そして、

「闇の雷よ！」  
いかずち

大太刀が大上段から振るわれて、鬼の力が籠った雷の刃がフェイトに襲い掛かる。

だが。

「ソニックムーブ！」

当たる瞬間、フェイトの姿が消えた。

「何っ!?!」

消えた直後に”山河慟哭”の刀身が地面に振り下ろされ、雷が落ちる。

気配を感じるのは蒼鬼の背後。

「ジェットガンバー！」

「ぐはあっ！」

瞬間、蒼鬼の背中にフェイトは今出せる最大の攻撃を放った。

背中に納めていたもう一つの紅い大太刀、”血染山河”と青い具足に防がれたが蒼鬼の身体は吹っ飛ばされ、塔に真っ正面から激突、気を失ってしまった。

「はあ、はあ……。」

やった……？」

半ば本気の攻撃が決まり、フェイトは安堵をする。

「さあ、”ジュエルシード”を回収し、あの者を隊舎に連れて行きましょう」

「解ってるよ。”バルディッシュ”。

さあ、皆の所に」

そう言いかけて、フェイトは先程蒼鬼の攻撃の場所を見て固まらずにはいられ無かった。

振り下ろされた場所から、塔（以下ビル）をいくつも斬り裂き、雷で破壊された痕があったのだ。

もしあれを避けずに防御していたら、どうなっていたか、想像するに容易い。

「一体、何者なんだろう……？」

呟くフェイトの声は、廃棄都市の空気の中に消えていった。  
。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1626ba/>

---

異界に降りる黒き鬼武者

2012年1月4日02時52分発行